

人工的言語を失った人間は表現的なのか

——トマス・リードと言語の改善

中 元 洸 太

はじめに

トマス・リードは言語を「他人に自らの思考、意図、目的、欲望を伝達するために人類が用いる、あらゆる記号」(IHM 51)とみなした。ここでは、世界に存在する事物や心のなかの概念に対するラベル付けよりむしろ、他人への伝達を主目的とした言語観が示されている。こうした彼の言語についての議論はしばしば現代的な言語論と関連付けられてきた。言語行為論と結び付ける形でリードの社会的な心の働きを紹介したレーラーの議論(Leher 1989: 93)や、彼の議論をデイヴィドソンの好意の原理の先取りとして解釈するアリーの議論(Arre 2016)はその一例と言えるだろう。近年ではこれまで未公開だった原稿がエディンバラ版全集として公開されるなか、他人との言論の基礎となるリード自身の言語についての考え方、特に彼が『常識原理に基づく人間精神の探求』(以

下『探求』と略記)でとりあげた自然的言語(natural language)と人工的言語(artificial language)の区別についても研究が進んでいる(e.g. Copenhaver 2020)。こうでリードは私たちが普通「言語」と呼ぶ英語や日本語といった言語を人工的言語、人工的言語以前に人々が表情や声色、挙措で他人に自分の考えを伝える言語を自然的言語と呼んでいる。

しかし、リードの言語論に注目する流れがあると云っても、『探求』で彼が残した不可解な記述については、これまであまり注意が払われてこなかったように思われる。彼は当時の人工的言語にあふれた世界が自然的言語の腐敗を招いていることを危惧し、人工的言語を廃止することが雄弁家や画家を生み出すことに繋がると、一見して奇妙な主張を残しているのである。

残念ながら『探求』における二つの言語の議論は、その後のこの主張を解説する形では展開されない。そこで本稿では

リードがなぜこのような主張をしたのかを、残された彼の講義ノートなどから整合的に読み解くことを目的とする。特にここでは、彼が二つの言語が改善すると考えていることを手掛かりに、人工的言語が廃されたあと何が起ることとリードは考えていたのかという観点から解釈を試みたい。『探求』のごくわずかな部分を担う主張を整合的に捉えることは、翻って彼の言語論の持つ構造を改めて整理することにも繋がるだろう。

以下ではまず、第1節で『探求』にみられる二つの言語の基本的な特徴づけを確認したうえで、先述した問題の記述を示し『探求』の内容に即して解釈する。しかし『探求』には、『雄弁家』のような実践的で技巧的な言語使用について多くの言及がない。そこで第2節では彼の講義ノートを参考にしながら、二つの言語が「雄弁」という実践的な言語使用においてどのように用いられるかを整理する。ここでは二つの言語が雄弁家の目的に応じて相補的に雄弁を構成する様が確認される。第3節ではリードが二つの言語の発達を二通りの形で捉え、特に実践家による改善を重んじていることを示す。これらの考察を踏まえて最後に再び『探求』におけるリードの記述を見直し、問題となった彼の主張は自然的言語の単なる回復をうたったものというよりも、むしろ自然的言語に立ち返ることで人々が再び二つの言語の健全な関係を取り戻すことであったという解釈を示す。

1. 人工的言語の廃止？

今日「自然的言語」とは英語や日本語のような日常会話で用いられる言語、「人工的言語」はエスペラント語やジョージ・オーウェルの『一九八四年』に出てくる「ニュー・スピーク」のように、既存の言語のほかに新しく人工的に作られた言語を指すように思われるかもしれない。しかし自然的言語と人工的言語の区別は先述の通り、リードにおいては異なる意味を持っている。この区別は人間の五感を分析する『探求』の「聴覚について」で、二種類の記号として以下のように持ち込まれる。

第一に、その記号を使用する人々の間で契約や同意によって結び付けられた意味しか持たないような記号。第二に、あらゆる契約や同意に先立って、誰もが自らの本性の原理によって理解するような意味を持つような記号。言語は、それが人工的な記号から成る場合なら人工的言語と、自然的記号から成る場合なら自然的言語と呼ばれるだろう。(IHM 51)

ここでリードは自然的言語を「事前の同意がなくとも人類に了解される記号」、人工的言語を「事前の同意があつて初めて了解される記号」として区別している。たとえば誰かがこちらを睨み凄みのある声で迫ってくる様子を見れば、おそらく相手が大抵どのような地域の人であれ、その人が怒ってい

るのだと私たちは考えるだろう。こうした表情や声色、挙措が自然的言語に該当する。これに対して、たとえば『Quirico』という言葉が何を意味するかは、あくまで私たちの同意によって決められる。こうした今日の私たちが「言語」と呼ぶ、人工的な記号の体系が人工的言語と呼ばれるのである。

リードはさらに、二つの言語のうち自然的言語が人工的言語に先立つだけではなく、人工的言語を発明するための必要条件であることを次のように述べている。

こうした定義を前提して、もし人類が自然的言語を欠いていたならば、人々は理性と才知によって人工的言語を発明しえなかっただろうということが証明できると思う。というのも、あらゆる人工的言語はある記号にある意味を結び付ける何らかの契約や同意を想定している。したがって、人工的記号の使用以前に契約や同意が必要となる。しかし、記号や言語なくして契約や同意はありえない。したがって、人工的言語が発明されうる以前に自然的言語があるはずなのである。(IHM 51)

自然的言語によるコミュニケーションがあつてこそ、人工的言語は発明される。このことはたとえば、共通の言語を持たない人たちの間でどのような活動が行われるかを想像すればよい。たとえば航海者は見知らぬ海岸に辿り着いて、自分たちと同じ言語を知らない人々とも互いに友好を感じ取り、物々交換をすることが必要 (cf. LRF 47)。彼らがあるものを指

示して声を出したり、航海者がそれに対し頷いたりするなかで、共通の人工的言語を生み出す契機を得るのである。(1)

もちろん、自然的言語が人工的言語を生み出せば前者が無用の長物となるわけではないだろう。このことは、私たちが相手の表情や声色を感じ取りながら他人と会話をしているという事実からも了解できる。ところがここで問題なのは、リードがより過激な仕方で自然的言語の重要性を示していることである。

市民生活の洗練が自然的言語の欠陥を補うのではなくそれを根こそぎにしてしまい、退屈で生気を欠く無意味な分節音や、大したことのない文字の殴り書きにしてみたってのは何とも残念なことではないだろうか。「……」しかしこれが人工的言語の完成ならば、確かにそれは自然的言語の腐敗なのである。(IHM 52)

分節音の使用と書き言葉を人類の間で一世紀廃止してみよう。そうすれば、誰もが絵描き、役者、雄弁家となるだろう。そんなことが実践可能だと言っているのではないし、もし可能だとしても、その利益が失うものと釣り合うわけではなからう。しかし人びとが本性と必要性によって互いに話し合えば、彼らは自分のことを分かちあうようにするため、自らの能力にあたう限りあらゆる手段を用いるはずなのである。(IHM 53)

最初の引用では、無意味な分節音や文字の殴り書きが、明らかに人工的言語と結び付けられており、この引用は人工的言語の完成が自然的言語の腐敗になると訴えていることになる。次の引用ではこうした人工的言語の廃止が提案され、これによって誰もが絵描きや役者、雄弁家になるという主張がなされる。人工的言語を失った人々が互いに「話し合」、うたためには自然的言語しかない。したがって彼は人工的言語を排した自然的言語の復興こそが、絵描きや雄弁家の誕生につながる」と述べているように見えるのである。

引用が示す通りリードは反実仮想的にこの提案をしているものの、それでも大胆にみえるこの発言は、当時の一読者にも同じように映じたらしい。『クリティカル・レビュー』誌の匿名のレビューは、アメリカのエスキモーやアフリカの黒人を例に挙げて、書き言葉や分節音による発音を持たないにもかかわらず彼らのなかに絵描きや雄弁家がいるとは聞いたことがないという。そして彼は、「この点について博士の推論に同意することは人の常識をぎよつとさせるだろう」とさえ述べている (Anonymous 1764: 326)。レビューの推論はそもそも、エスキモーや黒人が人工的言語、絵画や雄弁を欠くと断じている点で今日の私たちには間違っているように思われる。ただそれでも、人工的言語の廃止が多大な犠牲を払って雄弁家を生み出すというのは確かに奇妙な話で、あたかも英語という人工的言語によって著作をものする著者自身が自分の使う道具を放棄してしまいたいのかのような感さえ受ける。(2)

もつとも、『探求』の前後の文脈を捉える限り、リードの意図は自然的言語を欠いた人工的言語が「表現的」ではないことを強調することだったように見える。

人工的言語は指示するものの、表現はしない。人工的言語は代数記号がそうするように知性に向かつて語るが、情念、情感、そして意志はそれを聞かない。それらが注意を向け従順となる自然的言語において私たちが語りかけるまで、それらは眠って不活性のままなのである。

(IHM 53)

この引用を見る限り、二つの言語はそれぞれ異なる職分を担っているようにみえる。つまりリードは人間の心が持つ能力を知的・活動的能力と二つに区分するが、人工的言語は代数記号のように知的能力に、自然的言語は表現的に情念や意志といった活動的能力に語りかけるようにみえる³⁾。しかしリードの奇妙な主張をめぐる議論はこれ以上『探求』や以後の著作のなかでは展開されない。そこで、次節では今日の全集に残された雄弁についての講義ノートをもとに、リードが人工的言語を排することで生まれると考えた「雄弁家」についてどのような考えを持っていたかを整理することで、実践的な側面から彼の二つの言語への態度を探ってみたい。

2. 雄弁の分類

リードが生きた時代は、ベーコンやデカルトの影響を受け

近代科学が発展し、様々な研究が進んでいだ時期でもあった。こうした近代科学の進展は、既存の論理学や修辭学に対して二つの方向転換を要求した。ひとつは形式的で新しい知識の発見に役立たないアリストテレス流の三段論法の論理学を見直し、科学的な探求を行ううえで役にたつ新しい帰納的な論理学を考えること。もうひとつはこうした論理学とセットで、装飾的に言葉を用いるのではなく厳密さや正確さ、簡明さによって特徴づけられる修辭を新しく提出することであった。こうした近代における論理学・修辭学再編の動きはスコットランドにも広がり、リードや、彼の同郷人のダンカンやキャンベルにも影響を与えたと考えられている (Howell 1971, LRF Introduction)。(4)

このような時代の流れのなかで、リードは雄弁を「それによって意図された目的に応ずるように話す技能」(LRF 204)として定義する。彼はたとえばキケロの雄弁の定義「適切かつ装飾的に話す技能」に対し、雄弁が必ずしも装飾を必要としないと訴える。また、アリストテレスの定義「説得するにふさわしいあらゆる主題を知覚する能力」に対しては、私たちが雄弁を用いる目的は説得に限らないと応ずる (LRF 204-205)。リードのこの粗い定義は、彼が言語使用に様々な目的があることに對し自覚的であったことを反映していると言えるだろう。

目的に応ずる技能という観点から雄弁が語られる以上、リードの言う雄弁は宣言や演説といった公的な言語活動にとどまらず日常会話のような私的な言語活動をも含んだ幅広い

ものとなり (cf. LRF 238)、こうした雄弁は目的に応じて分類されることになる (LRF 213-226)。以下にその五つを列挙しておく。

(1) 単なる説明。ここで必要なのは正確さ、即ち誤解が生じないように相手に正しく自分の言っている意味を概念的に把握させること (Apprehension) である。こうした説明では医者が患者の所見について述べる場面や農業の運営についての指示などが想定されており、余計な装飾はかえって適切な概念的把握を妨げるといふ点で忌避される。

(2) 論理的推論に関わる雄弁。こちらも正確さが重視されるが、相手の概念的把握のみならず、判断に訴える。リードは例として、ユークリッドの数学の証明を挙げている。

(3) 歴史的・詩的描写によって相手の嗜好 (passio) に訴え喜ばせる雄弁。詩が現実の事物を描かなくてよいように、この雄弁はそれ自体としては真理と関係しなくてもよいが、「美しかったり優美であったり偉大である事物についての自然的記号によつて」(LRF 221) 的確に対象を表現する必要がある。

(4) 同情や恐怖、愛情など情念に訴える雄弁。これは人を喜ばせる (3) の描写による雄弁と排他的に区別されるものではないが、雄弁家が自らの意図を見破られないように適切な対象を提示することで、聴衆の情念に働きかける雄弁全般を指している。

(5) 聴衆の意志に働きかけある行動に差し向ける説得の雄弁。これは多くの場合、(2)と(4)の適切な混交によって可能になるとされ、雄弁家は聴衆や話題に合わせて両者のバランスをとる必要があるとされる。

こうした雄弁の分類はそれぞれ概念、判断、嗜好、情念、意志に働きかける、という形で、人間の心の働きとも対応した分類となっている。このうち前三者は知的能力、後二者は活動的能力に該当している。前節の解釈ならば人工的言語は情念や意志に働きかけないとされ、(3)は(4)の特別なパターンであることを踏まえるならば、大雑把に人工的言語は(1)～(3)、自然的言語は(3)～(5)の雄弁に関わるようにみえる。

ところが、うえで挙げたリードの分類が「目的に応じた心の働きに作用するように雄弁する」という観点でなされたものとしても、実際の雄弁では人工的言語と自然的言語がどのようなバランスで用いられるかが問題となる。たとえば「あらゆる修辭的な行為や発声はある自然的記号の使用に還元される」(LRF 228)以上、知性に訴える(1)(2)の雄弁も発声を伴うならば自然的言語に関わっている。これらの雄弁では「話者は自身を完全に落ち着いて、あらゆる情念から自由な状態におかねばならない」(LRF 215)のであって、このような自然的言語でいたずらに自らの情念を表現しないことが求められるのである(cf. LRF 215, 224) (iii)。逆に、私の苛立った顔があなたの心情に変化をもたらすように、自

然的言語はそれ自体で情念を動かすかもしれないが、描写や説得には自然的言語のみならず人工的言語による説明や論証が不可欠となる(cf. LRF 216)。このことはリードが意志に訴える雄弁を、論証的な雄弁と情念に訴える雄弁の混交物であると考えることから明らかである。二つの言語が実際には入り混じると同じように、この五つの雄弁も理論的に区別されながらも、実際にはそれぞれが入り混じり、一つの雄弁を構成しているのである。

このように、リードは目的とそれに応ずる心の働きを念頭に雄弁を分類しつつも、その実践においては二つの言語が雄弁の目的に応じてバランスをとりながら協働する様を描いている。こうした実践的な雄弁についての議論は二つのことを示唆している。第一に、彼は決して人工的言語の存在を「無意味な分節音」や「書き殴り」として無用の長物と捉えていたわけではないこと。第二に、前節で引用した『探求』に基づく二つの言語の心の働きとの対応はそれほど単純ではなく、実際の雄弁では二つの言語がバランスをとることが重視されていることである。しかしそれならば当然、反実仮想的であるとはいえないゼリードは『探求』でそのような強いレトリックを用いたのかという疑問が生じる。このことを検討するには、彼が人工的言語の廃止によって何が起こると考えていたかを捉える必要があるだろう。そこで次節では彼が私たちの言語の改善をどのように捉えていたかに注目したい。

3. 言語における二つの進歩

前節では目的に応じた雄弁の分類がそれぞれ心の働きと対応していることを確認したが、これには異なる意味合いが込められている。というのも、雄弁の目的が訴えかける心の働きに対応することで、リードは次のように、人間精神について知ることが雄弁の規則を知るための基礎となるという態度をとっているからである。

雄弁の規範や規則についての知識は十分適切に科学と呼ばれうるだろう。そしてこの科学の一部門は精神の学 (Pneumatology) に基づいているのである。というのも、人間精神の成り立ち (constitution) によって、ある事物が本性上聴衆を喜ばせ、ある事物が情念を動かしたり説得したりする傾向を持つからである。(LRF 207)

リードがここで言う「精神の学」とは、人間精神の様々な働きや精神と身体結びつきについての学問を指す。前節で追ったように、リードの場合「雄弁」は、それが知的・活動的能力のいずれに訴えるにせよ、二つの言語双方に関わるものであった。したがってここで私たちは、雄弁、そして二つの言語がどのように発展するかについて一つの足がかりが得られる。彼は人間の精神について研究した成果が、雄弁の規範や規則についての知識を増すことに役立つのだと主張しているのである。リード全集の編集者であるブローディーは、

「リードの言葉の背景には、雄弁家がより深くこうした能力への洞察を深めればより確実に自分の求める効果を確保できるという、議論の余地のない考えがある」(LRF xlii) と、この精神の学に基づく言語改善を強調している (cf. EIP 1415)。たとえば自然的言語について、リードは以下のような記述を残している。

そして音楽や絵画、演劇の偉大な効果は、ある音や顔つき、態度、身体のある部分の運動の自然的記号と、こうした記号によって表現されたり惹起されたりする心の情念や感情との結びつきに基づいている。それと同じように、雄弁の偉大な効果は同じ原理に基づいているのである。(LRF 207)

ここでは、ある自然的言語とそれによって惹起される情念や感情の結びつきが精神の学によって解き明かされれば、私たちが一層雄弁の効果を生むことができることが示唆されている。たとえばどのような表情をすれば怒りが一層伝わるかを心理学的に研究する場面を想像すれば、このことは想像がつかだろう。

一方で人工的言語の場合、リードは自然的言語が人工的言語の成立要件だと捉えたわけだが、人工的言語が子供に学ばれるためにはさらに異なる条件が必要であることを指摘する。リードは私たちが社会のなかで言語を含め様々な能力を身に着けるために必要な原理として、他人のしていることを模倣

することや、他人が自分に話すことへの信頼を挙げている (LRF 5-16, IHM 192-194)。このような原理が判明すること、私たちは子供たちが一層自分たちを模倣し人工的言語を習得するよう促すことができるだろう。

また、ある程度成熟した人間の人工的言語について彼は、私たちの人工的言語が知識の発展とともに進歩すると考え次のように述べている。

もつばら、哲学者によって用いられる言語は、言葉数が多かったり判明ではなかったりするなかで、次第に改善していくだろうと望むだけの理由がある。知識における改善と言語における改善は手を携えているのであり、互いに促進しあうのである。しかし私たちの知識が不完全なうちは言語の不完全さが完全に癒されることはないであろう。(EIP 530)

こうした人工的言語の改善の基礎には、区別するべきものをひとつずつ個別に概念し、種類関係に分け一般概念を構成していく知的能力が関わるという意味で、精神の学に基づいているのである⁽⁶⁾。この原理に基づき文法家や修辞学者、哲学者は、たとえば普通の人が区別しない細かい文法事項を区分するなどして文法や雄弁の規則を整備することができる (cf. EIP 378)。

以上みてきたように、二つの言語は精神の学に基づいて改善されるようにみえる。ところが、リードの講義ノートでは、

雄弁の発展を実践者（つまり雄弁家）に委ねているようにみえる箇所が散見される。たとえばリードは「この技術の原理を学術的に理解することと、それを実践に移すことは全く異なる」(LRF 208) として雄弁家と修辞学者の区別が古代から存在したことを指摘し、一例としてイソクラテスを挙げる。イソクラテスは修辞学者として多くの人々を教えたが、自身は公共の場で雄弁を発揮する能力を有していなかったのだとリードは考えるのである。

このような雄弁家と修辞学者の区別を踏まえて、リードは次のように異なる仕方で言語の改善について説明する。

どのような言語も、最初は不完全で、偉大な雄弁家の目的にはそぐわない。良い書き手と良い話し手の継承が次第に言語を洗練・完成させ、彼らは足りないものを補い、無用なものを削ぎ落とし、曖昧なものを区別し、耳障りなものを調子よくし、構文の規則を定め、その言語のもととなる言語に由来するか他の言語から借りた多くの言葉でそれを豊かにしていくのである。(LRF 210)

リードは一方で分析的な精神の学が雄弁の規則を知らせるという主張を展開しつつも、実際の言語改善については修辞学者ではなく良き言語使用者、つまり雄弁家を引き合いに出している。そしてその際、雄弁家が参照するのは過去の雄弁家の記録や現在いる雄弁家による「例示」であって (LRF 209)、リードは彼らが修辞学や精神の学の規則によってこそ雄弁を

用いるようになるとは言っていないのである。さらに彼は、言語を木にたとえながら次のようにさえ述べている。

文法家は疑いなく、それ「言語という木」の秩序や美しさに大いに貢献しているし、哲学者は私たちの知識を増すことで木に多くの立派な枝を付け加える。しかし、文法家と哲学者の助けがなくなると、それは木であり続けて来ただろう。(C 102: 192-193)

先に私たちは、哲学による知識の進歩が言語の進歩と連動するという主張を見てきた。しかしここでリードが示唆しているのは、こうした人工的言語への寄与にもかかわらず、文法家や哲学による改善がなくとも言語があくまで言語として機能するという事実である。この考え方は先の引用と併せて、言語の改善が精神の学に基づくという考え方とは異なるもののように見える。

以上のように、リードの議論では、精神の学に基づく雄弁という考えと実際に言語を改善していくのは雄弁家だという二つの言語改善論が並立している。これは雄弁の規則をもたらず精神の学（理論）と雄弁家の実際の営み（実践）がしばしば相補的であることを鑑みれば決して矛盾はしない。ただしリードは二つの改善について、「それら「雄弁の技術」は規則によるよりも模倣によってより容易に学ばれる」(LRF 210)と実践の優位を説いている。

もっともリードはこうした実践による改善の優位が何を根

拠にしているのかについて、明確にしていない。しかしこのことはたとえば自然的言語をそのまま人工的言語の規則に交換できないことから理解できよう。たとえば自然的言語を心理学的に解き明かして「自分が怒っていることを示すために、眉間にしわを寄せる方が良い」と規則を立てたとする人はこの規則を踏まえたうえであっても、その内実を実際の自然的言語、たとえば実際に眉間にしわを寄せた人を見たり、自らも感情をそのような自然的言語で伝えたりする過程を経る必要があるだろう。

もっとも、リードはこうした実践に即した言語改善論から、文法家や哲学者が必要ないと言っているのではない。彼はこうした研究者がいなくとも言語が成立すると述べるだけで、理論が実践に用いうる規則を提供することは認めていた。ニューマハーで長く牧師の職にあった実践家としての経験を持つリードは、牧師の雄弁について理論的に講義をしている(LRF 240-250)。彼が自らの説教を聞かせるよりも牧師にふさわしい話し方について講義していること自体が、リードにとって理論が単に実践的な例示に劣る代替物だと考えられていないことを示していると見えるだろう。リードの言語改善論は、人間精神の学こそがさまざまな学問の基礎となるというリードの公式見解が、あくまで実践と緊密に結びついて初めて有効になるという事実を具体的な形で示しているのである。

おわりに：『探求』の再解釈

以上の議論を踏まえたうえで、改めて第1節で示したリ

ドの主張に耳を傾けよう。彼は市民生活の洗練が人工的言語を完成させ自然言語を腐敗させると考え、人工的言語の廃止を訴えたのであった。それではこの腐敗とは何を意味しているのだろうか。第1節に示した二つの引用の間に、リードは次のようなヒントを残している。

音楽家、画家、俳優、雄弁家の芸術はそれが表現的である限り自然の言語であることは容易に示されるだろう。〔……〕この自然の言語は生まれたときに携えてきたものであるのだが、不使用によって学ばれてこなかったものであり、それを回復するには非常な苦勞があるのである。

(IHM 53)

ここでの彼の着眼点は、表現的な自然言語が不使用のために学ばれないことである。前節で確認したように、私たちの言語の改善について、リードは実践による改善や例示と模倣による学習を重視していた。うへの言葉は、ある文化において自然言語の使用自体が滞り、人類に共通するはずの自然言語が例示や模倣を通じて適切に学ばれない様子を示唆している。しかし、仮にこの引用を踏まえても『探求』の記述からこれ以上の結論はあまり引き出せない。自然的言語の使用を再開することで話は済みそうである。

それでは発想を逆転して、もし人工的言語がなくなれば事態はどうなるとリードは考えていたのであろうか。これまで論じてきたリードの言語についての考え方を踏まえると、彼

の発現の真意を再構成できるのではないだろうか。まず人工的言語を失ったとしても、人間は自然的言語から人工的言語を生み出すことができるのであった(第1節)。最初の人工的言語はたとえば「私があなたからパンをもらう」という意味を一語で表すような一語文かもしれないが (cf. C 103: 193)、人々は実践のなかで自らの目的に応じて言語を改善していくだろう(たとえば上の想定に立てば、「パン」だけを意味する言葉を生み出すように) (第3節)。この実践的な言語の改善は「彼らは自分のことを分かってもらうようにするため、自らの能力にあたう限りあらゆる手段を用いるはずなのである」(IHM 53)という、目的を達するための努力と一致している。人工的言語が成熟した暁には、文法家や哲学者が文法や雄弁を規則に集約するかもしれない。しかしこうした規則を示しつつも、自然的言語の不使用をリードは望んでいなかった。彼は目的に応じた雄弁の分類を示し、自然的言語と人工的言語がバランスをとって運用されることを望んでいたのである(第2節)。

こうして、リードの不可解な主張は人工的言語を単に廃止して表現的な自然言語を取り戻すだけの主張ではなくなる。彼の主張はむしろ、当時における自然的言語の不使用と、おそらくは適切な模倣による学習の対象が欠如していることを危惧して、もう一度バランスの取れた二つの言語の関係を取り戻すことだったと考えられる。今日、新型コロナウイルスで人々の生活がかき乱されるなか、私たちはこれまでになく形で自然的言語の不使用に直面している。もちろんビデオ通

話やマスクを介した対面を通じて、私たちは多くの自然的言語を犠牲にせずに済んでいる。しかし、たとえばビデオ通話による交信が可能でも私たちはカメラに向かって話すがゆえに前はどうまく相手と視線を合わせて語ることができないし、マスクをしたままの対面では表情による意思疎通が困難となっていることは多くの人が認めることだろう。18世紀の哲学者が残した一見して不可解な主張は、以上のように捉えなおすことで現在の私たちの生活に対しても同様の危機感を抱かせる言葉となるのである。

参考文献

リーットの引用に際しては、各文献の最後尾に略号と引用の形式を示した。

- Anonymous (1764), *An Inquiry into the Human Mind, on the Principles of Common Sense*. By Thomas Reid, D.D., Professor of Philosophy in King's College, Aberdeen. 8vo. Pt. 6s. Boards. Millar, in: *The Critical Review: or, Annals of Literature*, London, vol. 17, May, 321-329
- Ayre, A.W.G. (2016), Reid's Principle of Credulity as a Principle of Charity, *The Journal of Scottish Philosophy*, 14:1, 69-83
- Copenhaver, R. (2020), Reid on Language and the Culture of Mind, *Asiatic Journal of Philosophy*
- Howell, W.S. (1971), *Eighteenth-Century British Logic and Rhetoric*, Princeton, Princeton University Press
- Lehrer, K. (1989), *Thomas Reid*, New York, Routledge
- Reid, T. (1997), *An Inquiry into the Human Mind on the Principles*

of Common Sense, in: *The Edinburgh Edition of Thomas Reid* (ed. Brookes, D.), Edinburgh, Edinburgh University Press (邦訳：リード、トマス(2004), 朝広、謙次郎(訳), 『心の哲学』, 知泉書館; 引用に際しては邦訳を参考にしながら、略号 IHM を用い頁数を示した)

—— (2002a), *The Correspondence of Thomas Reid*, in: *The Edinburgh Edition of Thomas Reid* (ed. Wood, P.), Edinburgh, Edinburgh University Press (引用に際しては略号 C を用い書簡番号 x と頁数 y を Cxy という形で示した)

—— (2002b), *Essays on the Intellectual Powers of Man*, in: *The Edinburgh Edition of Thomas Reid* (eds. Brookes, D. and Haakonssen, K.), Edinburgh, Edinburgh University Press (引用に際しては略号 EIP を用い頁数を示した)

—— (2004), *Thomas Reid on Logic, Rhetoric and the Fine Arts*, in: *The Edinburgh Edition of Thomas Reid* (ed. Broadie, A.), Edinburgh, Edinburgh University Press (引用に際しては略号 LRF を用い頁数を示した)

Stewart D. (1852), Account of the Life and Writings of Thomas Reid D.D., in: *The Works of Thomas Reid, D.D.: Now Fully Collected, with Selections from His Unpublished Letters* (ed. Sir William Hamilton), Edinburgh, Macachlan and Stewart, 3-38

Turri, J. (2015), Reid in the Priority of Natural Language, in: *New Essays on Thomas Reid* (ed. Rysiew, P.), New York, Routledge, 214-223

【註】

(一) 上掲した二つの言語に対して、トウリーは二つの点で重

要な批判をしている (Turi 2015)。第一に、自然的言語は人類全体が共有せずとも人工的言語を発明し使用する者同士の間で共有されていたら良いこと。たとえば、ある国の自然的言語（たとえばインド人の領き方や日本人のほほえみ）は他国のの人にとっては自然に理解しがたいかもしれないが、こうした自然的言語を共有している同郷人たちは人工的言語を生み出せるだろう。第二に、自然的言語の先行が人工的言語の発明に必要だという主張は一定の説明能力を持つものの、人工的言語の発明が必ずしも同意を必要としない特殊な事例が考えられるということである。

(2) ここで取り上げた匿名のレビューと比べると、この点でリードの見知らぬ民族の人々への扱いはまだ穏便である。彼は一七四七年の前後、シャルボワによるカナダ人についての記述を読んでいたことを書き残している (C 103; 194)。彼の記憶によると、カナダのある地域(リードはヒューロン族ではないかと注釈している)では各村に雄弁家がいたとされる。

(3) ただしのちにリードは『知的能力試論』で、知性の働きにも活動性が含まれていること、意志の働きはその対象の知性による把握を必要とすることを述べている (EIP 64-65)。次節で述べるとおり、リードは二つの言語が担当する心の働きに対応するというよりも、心の働きに訴えるために必要な両者のバランスを重視している。

(4) リードはケイムズ卿の『人間史素描』に「アリストテレス論理学についての小論と所見」(LRF 97:149)という文章を寄せている。ハウエルは特に、それ以前はあまりメスを入れられていなかった探求の論理としての三段論法に

リードが鋭い批判を加えたことを評価している (Howell 1971: esp. 385-389)。

(5) デュガルド・ステュワートは、グラスゴー大学でのリードの講義を次のように評している。一見して活発さのないリードの話し方は彼自身が嘆く自然的言語の腐敗そのものに見えるかもしれないが、あくまで内容を正確に理解させようとする雄弁の用い方だと思えば好意的に理解できる。

彼の話し方や教え方にはこれといって魅力的なところはなかった。彼は即席での語りに熱中することもしばしば、読み方も自分が書いたものの効果を増すようにしようとしてもいなかった。ところが彼の文法は単純明快で、その性格は真面目で権威あるものであり、彼の教授する学説に若い聴講生は総じて関心を持っていたため、彼が教えた数多くの聴衆たち皆に最も静粛で尊敬ある注意をもって彼の話は聞かれたのである。(Stewart 1852: 10-11)

(6) こうした人工的言語の発展は、同時に私たちが他人に意見を伝えるだけではなく一人で秩序だっと思考する原動力ともなっている (EIP 69)。ただしこのことは、人工的言語が社会性を欠いても発達することを意味しない (cf. LRF 4041)。人工的言語が社会を必要としながらも個人的な思考に用いられるまでの過程については Copenhaver 2020 が説得的な議論を提供している。